

平成 16 年 9 月 15 日

各 位

会社名 大倉工業株式会社
代表者名 代表取締役社長 鴻池 正幸
(コード番号 4221 東証第1部)
本社所在地 丸亀市中津町1515番地
お問合せ先 役職氏名
研究所 主任研究員 田中 住典
(TEL 0877-56-1120、
携帯 090-4509-6793)
東京支店 部長 生田 誠吾
(TEL 03-3209-2111、
携帯 090-2204-6554)

会社名 三井化学プラテック株式会社
代表者名 代表取締役社長 坂本 甫
本社所在地 東京都新宿区大久保2-3-4
(出光新宿ビル)
お問合せ先 役職氏名
業務部 総務・人事G グループリーダー
谷川 基(TEL 03-5155-3021)
営業管理部 生活資材G グループリーダー
伊藤 利樹 (片淵 淳二)
(TEL 03-5155-3023
携帯 090-3956-0482)

カラス対策用ごみ袋の開発に関するお知らせ

この度、大倉工業株式会社と三井化学プラテック株式会社は、国立大学法人宇都宮大学農学部杉田昭栄教授のご協力を得て、カラス対策用ごみ袋を共同で開発いたしました。本開発は、最近多発しているカラスによるごみ荒らしの被害軽減に、ごみ袋を通して少しでもお役に立ちたいとの両社の強い願いによるもので、以下にその概要をお知らせいたします。

昨今、東京都をはじめとする主要都市では、カラスによるごみ荒らしの被害が多発し、大きな社会問題となっています。このごみ荒らしの被害は、従来の黒いごみ袋ではほとんど見られなかったのですが、10年ほど前から多くの自治体が中身の分別状況の視認と、ごみ回収作業員の危険防止のために、半透明のごみ袋を指定化したことがきっかけで、被害が一気に拡大したと言われております。

大倉工業と三井化学プラテックの両社は、こうした状況を踏まえ、カラスの視覚特性を利用するという全く新たな手法で、「人間には半透明に見えても、カラスには中身がほとんど見えない」ごみ袋を開発いたしました。この開発は、「カラス博士」として知られる宇都宮大学杉田教授の多大なご協力を得て、同大学構内で飼育中のカラスを使っでの試験で効果を検証したもので、ここでの大きな成果をもとに共同開発を進めてきたものです。

今回、両社が開発したごみ袋は、カラスの持つ人間よりはるかに優れた色覚精度に着目し、この「よく見える」ということを逆手に取ったことが大きなポイントです。杉田教授の研究によれば、例えばこれまで東京都が推奨してきた炭酸カルシウム入り半透明ごみ袋を用いた場合、カラスは袋の中に入っているドッグフードをピンポイントで突付いたり、模擬牛肉と本物の牛肉を袋越しに見破ることができるという極めて高い識別能力を有することが確認されています。すなわち、カラスは基本的に目で餌を探するため、中身を見せなければいかに学習能力が高いと言われるカラスでも手の出しようがなく、それだけ高い効果が期待できるわけです。

大倉工業、三井化学プラテックの両社は、特殊な色素で着色した光線透過率の異なる30種類近いごみ袋を試作し、個々のごみ袋に対するカラスの行動調査を杉田教授に委託しました。その結果を詳しく分析したところ、ある一定の条件を満たす黄色系など数種類の袋に「人間には半透明に見えても、カラスには中身がほとんど見えていない可能性が高い」ことが確認されました。また、これらの基礎試験で効果の見られたごみ袋については、1カ月ほど前から既に東京都内のある自治体の協力を得て本格的な実証実験も行っており、当該フィールド実験でもカラス対策への手ごたえが得られています。

こうした中、東京23区清掃協議会は、同区推奨ごみ袋の規制緩和を発表しました。今年12月からは、現行の炭酸カルシウム入りごみ袋以外にも、再生品を配合したものや、半透明と安全性に係る一定の基準をクリアしたものであれば緑色や青色等の一部着色品の使用も認められることになりました。大倉工業、三井化学プラテックの両社は、これら市場動向の変化に即応し、最近大きな社会問題にまで発展しているカラスによるごみ荒らしの被害に少しでもお役に立てたらとの思いで開発に注力しています。

東京都によれば、平成13年に3万6500羽まで異常繁殖したカラスによる様々な被害を防止するため、平成14年度から3カ年計画でカラス対策に着手しており、昨年12月には約2万3000羽にまで減少したようですが、捕獲を主な手段としたため好奇心旺盛な若いカラスは減ったものの、生殖能力の高い親カラスはあまり減っていないのが実情で、本質的な対策には至っていないという意見も聞かれます。

このカラス対策ごみ袋の開発にかかわった杉田教授は、「これまでカラスの視覚を調べた研究はほとんどなく、中身を見えなくすることで対策は有効だと思う」としていることから、今後大倉工業と三井化学プラテックの両社は、本開発がごみ袋を通しての社会貢献の一環と位置付けて、早期完成に鋭意取り組んでまいる所存です。

以上